

ミヒヤエル・エンデ著  
『モモ』の世界構造について

小 林 良 孝

物語『モモ』には、『時間泥棒と盗まれた時間を人間に取り返してくれた子供についての不思議な物語』という副題がついている。

確かにこの物語は、不思議な物語りである。まず、登場人物に不思議な人物が多い。何と云ってもこの物語の主人公モモはきわめて不思議な人である。モモに敵対する主人公灰色の男たちも、モモに負けず劣らず不思議な人物である。モモの庇護者マイスター・ホラ、これはもはや完全にこの世の存在ではない不思議も不思議、本当に不思議な登場人物である。モモの親友中の親友であるジジにしろベッポにしろ、やはり不思議な人である。少なくとも、平凡な人ではない。

不思議なのは登場人物だけではない。物語の中では、これらの不思議な人々は全員、ある事件に巻き込まれて行く。その事件の核心にあるのは「時間」である。一体、時間とは何か？ これについては、エンデ自身が次のように言っている。

重大ではあるけれども、きわめて日常的な秘密が一つあります。人間は誰もがそれに関与していて、誰もがそれを知ってはいるのです。しかしそれについて考える人はごくごく少数なのです。大多数の人々はそれを単にそのまま受け取っているだけで、それについては全然不思議には思っていないのです。この秘密とは時間なのです。<sup>(1)</sup>

時間とは、全ての人々が日常的に持っているものなのに、時間とは何かと、正面きって問う人はきわめて少ないのである。そしてもし問われれば、この間に答えることは、まじめに考えればまじめに考える程、ますますむずかしくなる、実に不思議なものなのである。それと同様に「時間を盗まれる」とか、「盗まれた時間を取り返す」とかいうことも、ことの真相の解明はとてもむずかしい事件であり、「時間の花」とか、盗まれて殺された時間の「葉巻きたばこ」とかのいろいろな不思議な物と関連している。そして「マイスター・ホラ」とか

「灰色の男たち」とかの不思議な人物とも関連している実に不思議な事件なのである。

また、この物語が展開される場所も、不思議さに満ちている。この物語によれば、主人公モモが最初に登場した所は、古代に都市として繁栄し、そして現在に到るまで発展し続けている大都会の南の郊外、考古学な価値もなく、人々に忘れ去られ、訪れて来る観光客などほとんど居ない、小さな古代の屋外円形劇場の廃墟となっている。この物語の中にはこれ以上の説明はない。しかし、子安美知子著『エンデと語る』（朝日新聞社）の10ページによれば、この物語はイタリアのローマに対する捧げものであると、エンデ氏自身により明言されている。

ではローマ市の南の郊外に、これに該当するような古代遺跡は実在するのだろうか。実地調査をしたわけではないけれども、——そんなことをしたらエンデはあの世で大笑いするであろう——観光地図を見たくらいでは、それらしき所は見あたらない。それは当然だ。そこは何の観光価値もない所だと、はっきりと書いてあるのだから。いや、たとえそういう古代遺跡の円形劇場が実在するとしても、モモの住みついたこの廃墟はやはり不思議な空間なのである。不思議なのはモモが住みついたこの廃墟だけではない、この物語でモモがたどる〈いちどもない小路〉という名称の小路も、その小路のむこうの〈どこにもない館〉という名称の家も、更にそのむこうの世界の、えも言えぬ程美しい「時間の花」が生じ・咲き・散る「池」も、益々不思議な所である。

以上のように、この物語は不思議さに満ち満ちている。しかし、これらの数々の不思議な登場人物の関係にも、数々の不思議な空間・場所の関係にも、極めて明確で強固な秩序と構造が秘められているのである。『モモ』はファンタジック・ロマンであって、理論を論理として展開する学術書ではない。従って、この物語の基本構想はかくかくしかじかで、それを展開した構造はかくかくしかじかになっていますと、物語の中でエンデ自身が説明することはほとんどあり得ない。それはエンデがすごくきらっていることなのだ。それを秘密のうちに、なるべくそれと気づかせずに物語として展開しながら、読者を物語の中へ引きずり込み、手に汗握らせることこそ、エンデの本領というものである。それなのに、ああそれなのに、エンデが秘密にしておこうとしているその構造を、全く無粋なことにこの物語の中から洗い出そうというのが本稿のねらいなのである。

この秘密を、エンデ自身が思わず知らず、あるいはやむを得ず暴露してしまっ

た命題が物語『モモ』の中に一箇所だけ出てくる。それは、初めて〈どこにもない館〉を訪れたモモに対して、マイスター・ホラが語って聞かせた次の言葉である。

モモは大広間の中をキョロキョロ見まわして、それから尋ねました。「あなたは時計を実にたくさん持っているんですねえ。人ひとりひとりに、各々ひとつずつあるんでしょ、そうよね。」

「そうじゃないんだよ、モモ。」と、マイスター・ホラは答えました。「これらの時計は、私が道楽で集めたものにすぎないんだよ。これらは、各々の人が胸の内に持っているもののきわめて不完全な模造品にすぎないんだよ。」

(Sie sind nur höchst unvollkommene Nachbildungen von etwas, das jeder Mensch in seiner Brust hat. <sup>(2)</sup>)

これを味もそっけもなく、簡潔明解に本稿の筆者の言葉で言えば、「物は心の不完全な似姿である。」ということになる。これが、物語『モモ』全体を貫いている基本的理念なのである。とはいえ、現実の世界はそんなに単純ではない。我々の住んでいる世界では、「物」がいろいろな姿・形・種類をとって存在していることに疑念を懐く者は誰も居ない。しかし、わかりづらいのは「心」である。「心」もいろいろな姿・形・種類となって存在する。更にわかりづらいのは「霊」である。「心」の存在を疑う者はないとしても、「霊」となると、その存在さえも信じない人も多かろう。しかもこの「霊」がまたいろいろな位階で、各々の位階の霊がいろいろな種類をとって存在していると、エンデは言っている。霊の世界は、我々の大多数の者にとっては、神秘の世界であり、正に不思議な世界なのである。物語『モモ』の中に不思議な人や所が多々登場するのは、この物語が展開されている場が霊界にまで及んでいるからであろう。ミヒャエル・エンデは、画家であった彼の父エドガー・エンデの「死にゆく精霊たち」という題の絵にふれて、次のように言っている。

言ってみれば、精霊が死に込むことによって、そもそも物質が成立する。物質世界の創造行為はそのことにほかなりません。…ここでまたもや私たちの五感で知覚する世界の背後に、ほんとうにさまざまな叡知存在たちがいる、という見方につながっていくわけです。…天使、大天使、知天使、熾天使、その他さまざまな位階で名づけられる存在たちが居ますけれども、それらの存在は最終的には、物理的に見える世界と織りあわさって、巨大な一体性をなしているのです。<sup>(3)</sup>

これは、とりもなおさずミヒヤエル・エンデ自身の芸術観でもあり、彼自身の世界観でもある。このことを彼は次のように明言している。

子安 エンデさんの芸術観の中にはいりこんできたところで、もうひとつ、私の気になる言葉を『オリーブの森で語りあう』から取り出します。人間は、「人間だけの力で何もかもやってのけようと思う必要はない。世界には、他のいろいろな力が存在していて、それらが助けにはいたり、しかるべき条件をととのえてくれたりする」という、その「ほかの力」のことです。ドイツ語で「力」を意味する名詞をふた通り (Kräfte と Mächte) 使い、それも複数形になっている。これ程はっきり確信なざる「力」とは何のことですか。

エンデ それを聞かれれば答えなければなりません。この言葉は、私の全世界観、全人間観の表明なのです。宇宙のひろがりのなかには、人間以外の存在 (andere Wesen) が、じつにおびただしい数でいるということ——昔はそれらの存在を神と呼ぶこともあった。あるいは天使とか。いや、どう名づけるかは、たいして重要ではない。とにかく人間より高いところに、さまざまな位階をもった叡知存在たちがいます。それらの手が、私たち人間のすることに、ともに力をかしてくれている。彼らは、世界のための共同作業員たちです。

子安 エンデさんの本には、いつも必ず、いわばこの世ならぬ所からの助けの手が主人公におりてくる場面が多いのですけれど、そう、ちょっと例をあげるだけでも『モモ』のマイスター・ホラ、そこへ道案内をするカメのカシオペイア、…。で、それらの人間外登場物は、エンデさんにとっては、一種の比喩の材料というわけではないのですか。本当に高次存在として私たちに送ってくる力がある、ということの芸術的表現なのですか。

エンデ はい、もちろんです。私たちの全世界は、いつも「橋のむこうの世界」から送られてくる力があってはじめて成り立っています。それでもひとつひとつは、そのもうひとつの世界などありえない、と思っているのです。<sup>(4)</sup>

以上のことを総合して要約すれば、重要なことは次の三点である。

一 世界は、叡知存在、人間および物質の三者から構成されている。叡知存在は客観的に実在しているものであって、けっして単なる芸術的比喩ではない。

二 世界を構成している叡知存在、人間および物質は、互いに有機的に関連しあって存在しているものであって、けっして無関係にばらばらに存在している

のではない。世界は、これら三者の有機的結合体である。

三 叡知的存在は最も完全な存在であり、人間はそれの不完全な似姿・模造である。物は、例えば時計は、人間の心の中にあるものの不完全な模造品である。つまり、物質は人間の心の中にあるものの不完全な模造品である。

以上のようなミヒャエル・エンデの世界観が、ルドルフ・シュタイナーの世界観とよく似ていることは、既によく言われてきたことである。エンデは、自分とシュタイナーとの関係について次のように述べている。

エンデ 私の世界観と私の作品、という関連でもう少し話を続けるならば——たしかに私は30年以上もシュタイナーを読んでいます。けれども私はいつも、自分で正しいと感じたこと、自分の良心にしたがってこうあらねばならぬと思ったことをおこなってきました。ほかの人から指示されて行動することはありませんでした。私は自分の内なる羅針盤にしかしたがいません。…だからシュタイナーから学んだことも、私はすべて私自身のやり方に変容してしまいうように努めてきたのです。…

子安 ここで私が、「そしてアントロポゾフィーは、ミヒャエル・エンデの構成要素になりきった」というとしたら？

エンデ 私は、そうでありたい、と願っています。<sup>(5)</sup>

このようにして形成されたエンデの世界観および芸術観は、当然のことながら彼の作品『モモ』の中に反映されているはずである。この点を、『モモ』の中心的登場人物であるモモ、およびその他の登場人物、この物語の主題である時間、およびこの物語が展開される場・空間について考察することにする。

物語『モモ』には、エンデ自身が描いた1枚の口絵がそえられている。その口絵の最前景には、画面の底辺中央部からやや右へ傾きながら松の木の幹が1本、大きく描かれている。この松の木の枝葉は画面の上方約4分の1程の空間を占めているだけだから、この松は画面の中心部分を見通すには何のさしさわりはない。この松の木の幹のすぐ背後には、画面の中央左右いっぱい、崩れ落ちている部分が所々にある比較的小規模な古代屋外円形劇場の廃墟が描かれている。この絵を見る人の視線は、まず最初はこのすり鉢状の劇場の中心部にある舞台にくぎづけになるであろう。この舞台を円形に囲みながら階段状の観客席がほぼ同心円状にゆるやかにせりあがってゆき、やがて最上段のへりに到達する。中央の舞台にも、階段状の観客席にも、所々に雑草がはえている。もはや役者も観客も1人もいない。この円形劇場のむこうには、この廃墟を包むかの

ように中央から左の方へ並んで、5、6本の松の木がはえている。柄の長いこうもりがさの柄のような、途中で枝がない細くて長い幹、その上端に開いた雨がさのように枝葉が茂っているあの独特の姿をしているローマの松である。これらの松の樹冠も、上の方へのびて行って、画面のいちばん上の部分で、最前景に描かれている松の木の樹冠と重なっている。従ってこれらの松の木も、円形劇場のむこうを見わたすのにはほとんどさしさわりはない。円形劇場の廃墟のむこうには見通しのいい田園風景が広々とひろがっている。松の木の枝葉の下の方、ころあいの程よいあたりに、地平線が画面の左右いっぱい横切っている。その見通しのいい広々とした大地には、四隅の鉄柱をたすきがけ状のけたで組みあげた高圧電流配送用の電柱が列をなして描かれている。一番近くにあるのは、この円形劇場のすぐ向こうを、この円形劇場をとり囲むようにして並んでいる。よく見るとそのむこうにも列をなし、更にそのむこうにも列をなし、地平線のかなたに到るまで幾重にも列をなし、この円形劇場の廃墟におしよせてくる大軍のように、高圧電流用の鉄骨の電柱が目だたないように描かれている。実は、この古代円形劇場の廃墟は、モモの芸術的表現であり、これらの高圧電流配送用の鉄骨の電柱は灰色の男たちの芸術的表現なのである。更に、モモは質的価値の芸術的表現であり、灰色の男たちは量的価値観の芸術的表現である。『モモ』は「時間」をめぐって、この両者の抗争を物語った作品なのである。<sup>(6)</sup>

さて、話を口絵のことから、いよいよ物語へ進めよう。ある日、10歳くらいとおぼしい浮浪児の少女が忽然と現れ、この円形劇場の舞台の下の穴蔵のような荒れ部屋の中に、壊れた外壁のすき間からもぐり込んで、住みついたというのである。この噂を聞きつけた近隣のおじさんやおばさん達が、この浮浪児の身を案じて、この廃墟へ出かけて行って、身の上を尋ねる。

「おまえはモモという名前だって、言ったね。」

「うん。」

「かわいらしい名前だ。でもそんな名前は聞いたことがなかった。で、誰がその名前をつけてくれたのかい。」

「あたしよ。」と、モモは言った。

「自分でそう名前をつけたんだ？」

「うん。」

「それで、いつ生まれたんだい。」

モモは考え込んでいましたが、やっと言いました。「あたしはもうずっとここに居たわ。思い出せるのはそれだけよ。」

「そうしたらおまえには、おじさんとかおばさんとか、おじいちゃんとか、まあ、おまえが帰って行くことのできる家族はいないのかい。」

モモはその男の人の顔をただじいっと見つめているだけで、しばらくの間、口をききませんでした。それからやっと口ごもりながら言いました。「ここがあたしの家だもん。」

「そうか、そうか、」とその男の人は言いました。「でもおまえはまだ子供だ——としはいつたい、いくつなんだい。」

「100。」と、モモはためらいながら答えました。

そこに居た人々はそれは冗談だと思ったので、皆どっと笑いました。

「いや本気の話、いくつなんだい。」

「102。」と、モモは答えました。でも、もっと自信がなさそうでした。

まあ、ざっとこんな様子だったのである。要するに、モモ自身の記憶の中には、両親を含め家族というものが無い。自分がどこからやって来たのかわからない。というより記憶のある限りでは、ずうっとここに、つまりこの崩れかけた円形劇場の舞台の下の崩れかけた部屋に住んでいた、というのである。そして年齢は100歳か、102歳だというのである。つまり、モモの言葉によれば、モモの出自には、我々普通の人間にはつきものの時間規定も場所規定もあてはまらないのである。モモはいきなり、外見は10歳前後の少女として、古代の屋外円形劇場の廃墟に、忽然と出現したのである。しかし普通読者は、モモのこれらの言葉に深い意味のあるものとは受け止めず、次のように考えながらおもしろおかしく軽く受けながすであろう。当然この子だって、何年何月何日に、何市か何村かの何通りの何番地で、何の誰謀という名前の親から生まれたのにきまっているのに、この子はそんなことまで全然知らないかわいそうな身なし子なんだ、と。

真実はモモの言葉にあるのだろうか。それとも、普通の読者の想像にあるのだろうか。

この疑問に答える直接の答は、『モモ』の中にはない。しかし、エンデは、子安美知子著『エンデと語る』（朝日新聞社）の中で次のように語っている。

**エンデ** しかし、どんなに奇異で謎めいて聞こえようとも、事実があります。時間・空間の内部にあるこの世界、そこに時空に支配されない何か、たえず突き入ってきているという事実——絶対にあり得ないはずなのに、しかしたしかに生じています。見たくなければ、見えませんよ。世の中に厳然として起こる事実のなかには、それをほんとうに見るためには自

分の意志を働かせなければならぬ。見ようという気にならなければ見えない事実というのが、実際ありますから。(73 ページ)

とすれば、モモの言葉には一言の嘘もない。エンデの世界の中では、モモは本来は時空に支配されていない何かであった。それが時間・空間の内部にあるこの人間世界へ「突き入ってきた」存在なのである。それ故、モモは真実彼女自身が語る通りの存在の子なのである。この真実を見ることのできない者にとっては、モモは不思議な子、奇妙な子なのである。しかし、この真実を見ることのできる者にとっても、モモはやはり真実不思議な子なのである。

これで、信じようと信じまいと、忽然と廃墟に出現したモモの素姓は少しは明らかになってきた。

それでは次の問題へ話を進めよう。エンデの言う通り、モモは時・空に支配されない世界から、時・空に支配される世界に、つまりこの人間界にある円形劇場の廃墟に「突き入ってきた」のだとすれば、それ以前にはモモは、いつどこで、どんなふうにして、実在していたのだろうか。これについてはエンデは、正にこの物語『モモ』の第1部第5章「多くの人々のための物語とモモ1人のための物語」の中で、詳細明解に語っている。物語の中の物語の形で、観光ガイドのジジがモモ1人のために語る「魔法の鏡の物語」という題の物語がこれである。それは、次のように語られている。

昔むかし、モモという名前の美しいお姫さまが居ました。モモ姫はいつもビロードと絹に身をつつみ、雪におおわれた山の頂の色とりどりの色ガラスの城に住んでいました。

モモ姫は、およそ望むことのできるものなら何でも持っていました。食べるものはおいしいおいしいものばかり、飲むものは甘い甘いぶどう酒だけでした。眠るのは絹のふとん、座るのは象牙の椅子でした。彼女は何でも持っていました——しかし彼女はひとりぼっちだったのです。

召使も、侍女も、犬も、猫も、鳥も、そして花までも、モモ姫の身の回りのものは何もかもすべて、鏡にうつった像だけだったのです。

というのは、モモ姫は魔法の鏡を持っていたからです。その鏡は、大きくて、まるく、純銀でできていました。彼女はその鏡を、毎日毎晩、世界へ送り出すのです。そうするとその鏡は、陸をこえ海をこえ、都市をこえ野原をこえ、空をただよって進んで行くのです。それを見た人々はこの魔法の鏡を全然不思議に思わず、あれはお月様だよ、と言うだけでした。

ところで、この魔法の鏡は、帰ってくるといつも、旅の途中写し取った像



を全部、ぶるぶると体をゆすってお姫さまの前にバラバラッとふり落とすのです。その像の中には、道すがらありのまま写し取った美しいものもありますし、みにくいものもあります。おもしろいものもありますし、退屈なものもあります。お姫さまは気に入ったものだけを探し出して、他のものは小川に捨てました。…

ひとつ言い忘れていましたが、モモ姫は不死だったのです。彼女はいまだかつて1度もこの魔法の鏡に自分の姿をうつして見たことがなかったからです。というのは、この魔法の鏡に自分の姿を写して見た者は、それによって死すべき者となるからです。そのことをモモ姫はよく知っていました。だから彼女はけっしてそうしたことはなかったのです。

こうして彼女は魔法の鏡が集めてきたありとあらゆる像と一緒に暮らし、一緒に遊び、それで十分満足でした。

ところが或る日、この魔法の鏡が彼女にひとつの像を持ってきたのです。その像は彼女にとっては他のすべてのなによりも、もっと重大なものだったのです。それはある若い王子さまの像でした。彼女がそれを見たとき、彼への憧れはつるばかりで、どうしても彼のところへ行きたいと思うようになったのです。しかしいったい、彼女は何から始めたらいいのでしょうか、彼がどこに住んでいるのか、彼が誰なのか、はいうにおよばず、彼の名前さえ知らなかったのです。

他によい考えが思いあたらなかったのも、彼女はやむを得ず魔法の鏡をのぞき込む決心をしました。というのは、この鏡が自分の像をあの王子さまのところへはこんで行ってくれるだろう、この鏡が空にさしかかった時、ひょっとしたら彼は偶然に上を見あげて、自分の像を見してくれるかもしれない、そして空をただようこの鏡のあとを追ってきて、ここに居る私を見つけてくれるかもしれない、と考えたからです。

そこで彼女は長い間じいっと鏡の中をのぞき込み、彼女の像を写した鏡を下界へ送り出したのです。しかしこうして彼女はそのため死すべき者となったのです。…

モモ姫は待ちに待ちました。しかし、王子さまは来ませんでした。そこで彼女は、自分で下界へ出かけて行って、彼を探そうと決心しました。

彼女は、彼女の身のまわりにいた像すべてにひまを出しました。それからたったひとりで、やわらかい上靴をはいただけで、色とりどりの色ガラスの城を出て、雪におおわれた山々を越えて、下界へと降りて行ったのです。

彼女は、世界中のありとあらゆる国をさまよい歩いたあげく、ついに今日の国にやってきました。その時には上靴はすっかり破れていて、はだしで歩かなければなりませんでした。しかし、彼女の姿を写した魔法の鏡は依然としてこの下界の上空をただよい続けていたのです。…そうこうしているうちに、モモ姫のビロードの着物も絹の着物もすっかりボロボロになっていました。今や彼女は古いダブダブの男ものの上着を着、つぎはぎだらけのスカートをはいていました。そして古い廃墟に住んでいたのです。<sup>(7)</sup>

この話は、ひとつには、あまりにも並はずれの空想家であるため、時には人々から嘘つきと非難されることさえあった観光ガイドのジジの作り話として語られているために、もうひとつには、モモがはじめて円形劇場の廃墟に現れた時の様子を語っている箇所から40ページも後になって語られていて、この間いろいろな出来事が語られているため、この魔法の鏡の物語の中のモモ姫と円形劇場の廃墟に現れた浮浪児のようなモモとの関係に気づく読者は多くないかも知れない。そして、それをこと更に詮索する読者はそう多くはないであろう。しかし、エンデの世界観にてらして考えれば、この2人のモモの関係は、見落とされてはいけなし、見あやまられてもいけないのである。それ故、敢えて魔法の鏡の物語の要点を整理し、その関係を解明することにしよう。

一 まず始めに、超人間世界の天上界に、時・空の規定を持たない叡知存在であるモモ姫が存在していた。モモ姫は不死であった、つまり永遠の生命を持っていた。

二 叡知存在であるモモ姫の叡知は、自他ともにありのままに写す「魔法の鏡」であった。

三 ある日モモ姫は、その鏡が写して持ってきたひとりの見ず知らずの王子さまの像を見て、その王子さまにおさえきれない「憧」を懐いてしまった。そこでモモ姫はその王子さまを呼び寄せるため、自分の不死を捨てて自分の姿をその鏡に写し、その鏡を下界へ送り出した。

四 しかし、いくら待ってもその王子さまはモモ姫に気づいてくれなかった。当然、来てもくれなかった。そこでモモ姫は自らその王子さまを探し出すため、憧れを胸にひめて天上界から下界の「今日の国」へ降りてきたのである。そしてありとあらゆる国々を放浪したあげく、ローマ郊外の古代円形劇場の廃墟にたどりついた。ということである。

要するに、モモは時・空に規定されない叡知存在が、時・空に規定されている人間界に「突き入ってきた」存在なのである。それ故、廃墟に住みついた死

すべき人間であるモモは、叡知存在である不死のモモ姫の不完全な似姿・模造である。ということになる。これでモモの素性は明らかになった。

モモの前身談はこれくらいにしておこう。話を円形劇場の廢墟に住みついてから以後のモモに進めよう。近隣の人々の心配をよそに、モモはさっそく「聞く」という一種の超能力を発揮して、近隣の人々と理想的な社会を形成して行く。

この小さなモモが彼らのところに居る期間が長びくにつれて、彼らにとって、モモはますますなくてはならない存在になって行き、もしモモがある日突然ここから居なくなってしまうたらどうしよう、と心配する程でした。そういうわけで、モモの所にはいつもとってもたくさんの人々が訪ねてくるようになりました。モモのそばにはいつもだれかが話しこんでいる姿が見えました。モモを必要としているのにモモの所に来ることのできない人は、人をやってモモをむかえに来ました。モモを必要としているのにそのことに気づいていない人が居れば、まわりの人々はその人に、「ぜひモモの所へ行ってごらん！」と教えてあげました。

この言葉は、次第に近隣の人々のきまり文句となって行きました。そういうわけで、「ごきげんよう！」とか、「ごちそうさま！」とか、「おやまあ、たいへん！」と言うのと全く同様に、何か事がある度ごとに、「ぜひモモのところへ行ってごらん！」と言うようになりました。<sup>(8)</sup>

このようにモモの所にやってきた人々に対してモモがやってあげることができたことは、たったひとつ、全身全霊をかたむけて彼らの言葉に耳をかたむけてやることだけだった。ところがモモのこの能力は、不思議な能力だったのである。どうして不思議かという、モモに話を聞いてもらっていると、

- (一) ばかな人にも急にまともな考えが浮かんで来るし、
- (二) 自分のどこにそんな考えがひそんでいたのか全然わからないような考えが急に浮かびあがってくるし、
- (三) 途方にくれてどうしていいかわからなかった人は、急に自分がやろうとしていることがはっきりしてくるし、
- (四) ひっこみ思案の人は、急に心の中に勇気が湧いてくるように感じるし、
- (五) 不幸な人やしょげかえっている人は、自己の存在意義に対する信念や、自分の仕事の重要性に対する信念が湧いてきて、たのしい気分になるのである。<sup>(9)</sup>

(一) にあてはまるのは、左官屋のニコラと安居酒屋の亭主ニノである。彼

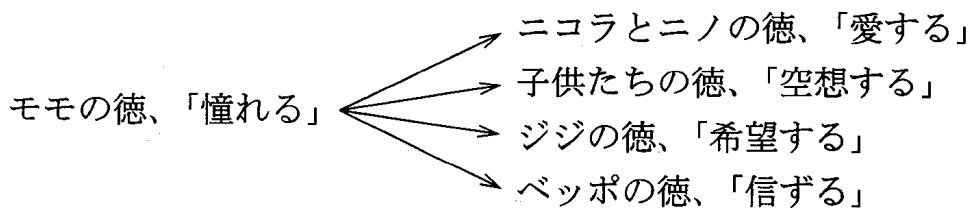
らはモモに話を聞いてもらうことによって、互いに相手を「愛する」能力を身につけたのである。

(二) と (四) にあてはまるのは、子供たちである。彼らはモモと一緒に居るだけで、奇想天外な遊びを思いつき、ひっこみ思案な子でも、その遊びに熱中し、見ちがえるほど勇敢に行動したのである。子供たちはモモと一緒に居るだけで、「空想する」能力や熱中する能力を身につけたのである。

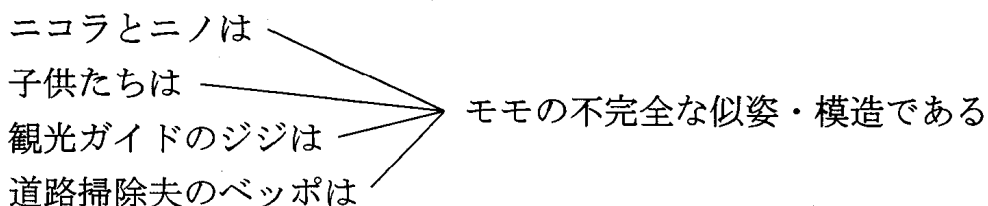
(二) と (三) にあてはまるのは、観光ガイドのジジである。彼もモモと一緒に居るだけで、彼の空想力は天衣無縫にはばたき始め、自分のやりたいことがはっきりしてきて、あすへ向かって「希望する」能力が生まれてきたのである。

(五) にあてはまるのは、道路掃除夫のベッポじいさんである。彼もモモに話を聞いてもらうことにより、道路掃除という仕事の重要さへの信念をますます深め、道路掃除夫であっても自分はこの世では唯一無二の重要な存在であるという信念をますます深め、ますます喜々として自分の仕事に着実に励むようになったのである。つまりベッポは、モモに話を聞いてもらうことによって、「信じる」能力をますます強固たらしめたのである。

つまりモモは、「聞く」という方便によって人々に、「愛する」、「空想する」、「希望する」、「信ずる」という超自然的な徳<sup>(10)</sup>を与えたのである。もともと持っていないものは与えることはできない。では、人々にこれらの徳を与えたモモは、本来どういう徳を持っていたのであろうか。その答は、本稿 142 ページの第四項の中にある。モモ姫は、「懂」を胸に秘めて天上界から下界へ、叡知界から人間界へ、降りてきたのである。それ故、モモが叡知界からこの世へ持ってきた叡知的徳は、「懂」だったのである。とすれば、モモが持っている「懂れる」という叡知的徳は、人間界ではモモの「聞く」という方便によって、巷の人々の四つの超自然的徳に分化し、開花したことになる。

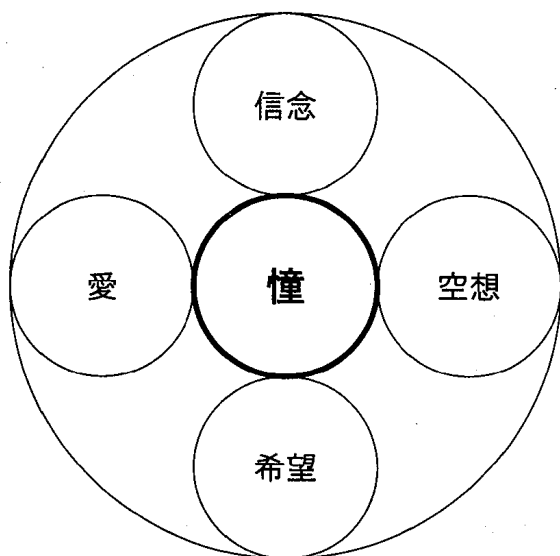


これをエンデの世界観で表現すれば次のようになる。



愛は  
 空想は  
 希望は  
 信念は

憧れの不完全な似姿・模造である。



これらの概念と概念との関係は、下記の図で表すこともできるであろう。

次に、モモの「聞く」行為を考察することにしよう。「愛する」、「空想する」、「希望する」および「信ずる」という四つの徳は、生命＝生活＝人間の時間——エンデは『モモ』において、正にこの生活としての時間を問題とした<sup>(11)</sup>——が健全であるためには本来備えていなければならない能力＝徳なのである。これらが失われると、生命＝生活は病的になり、全部失われてしまえばその人の生命＝生活は心理的には死の状態になる。モモは「聞く」という方便を駆使することによって、ニコラやニノその他の市井の人々の生活をより健康な状態に導いてやったのである。モモは「聞く」という医術によって市井の人々の心の病を癒し、彼らの心の健康を増進したのである。それ故に、何か困ったことが起きると、「モモのところへ行ってごらん！」という言葉がきまり文句になった程、市井の人々はモモを必要としたのである。モモが駆使した心の医術ともいべき「聞く」行為・能力は、モモより存在の位階が1段下位のニコラやニノその他の市井の人々から見れば、確かに不思議な能力であった。これについては、エンデ自身が次のように説明している。

86年の夏、来日中のミヒャエル・エンデ氏を私たちの日本シュタイナーハウスにお迎えしたとき、かねてからモモの「聞く力」に深くとらえられ

ていた友人たちのひとりが、

「エンデさん、あの秘密は何でしょう。不思議な力ですね。」

とたずねました。エンデ氏は、かみしめるような口調でこう答えました。

「モモが身につけていたような、人の話に聞き入る力、その秘密は、自分をまったくからにすることにあります。それによって、自身の中に他者を迎える空間ができます。そしてその相手をこの空間に入れてあげます。モモは、そうやって彼女の中にはいつてくるものが、良いものか悪いものかを問うことをしません。」<sup>(12)</sup>

モモが人の話に聞き入る行為は、からにした自分の心の中に、その人をありのまま、受け入れる行為だったのである。モモは人に対してだけこの「聞く」という行為を行っていただけではない。モモは、心棒づよく、歌を忘れたカナリアに1週間も耳を傾け、ようやく歌を思い出させることもあった。

モモは、犬や猫にも、コオロギやヒキガエルにも、そればかりか雨や樹々の枝にざわめく風にさえも耳を傾けました。

晩、友だちが皆家に帰って行ってしまうと、モモはひとりで長い間、この古い劇場の大きな石の縁に腰をおろして、星のまたたく満天に耳を傾け、ただただじいーっと偉大な静かさに聞き入るのです。

こうしていると、モモはまるで、星の世界に聞き耳を立てている大きな耳の真ん中に座っているような気分になるのです。そうすると、妙に心にしみ入る静かな、しかしすごく力強い音楽が聞こえてくるように思えてくるのです。

こういう夜には、モモはかならずとても美しい夢を見ました。<sup>(13)</sup>

つまりモモは、大宇宙の音楽を聴くことのできる霊聴能力の持ち主だった。モモが住みついた円形劇場の廃墟は、モモの霊耳の芸術的表現だったのである。

ここで、本稿で既に140ページから142ページに引用した「魔法の鏡の物語」を思い出すことにしよう。天上界の叡知存在モモ姫は、純銀でできている大きなまろい魔法の鏡を持っていた。モモ姫はその鏡を毎日毎晩、世界へ送り出していたのである。そうするとその魔法の鏡は、陸を越え、海を越え、都市を越え、野原を越え、空をただよって進んで行く、そしてその途中写し取った像をすべて、美しいものもみにくいものもすべて、ありのまま、モモ姫のところに運んでくるのである。すなわち、魔法の鏡は叡知存在モモの認識能力そのものであり、その鏡を世界へ送り出して写してきた像を見るということは、モモ姫の外界認識行為だったのである。廃墟に住みついたモモは人の話を「聞く」と

きは、心をからにするという。この時のモモの心は、モモ姫の魔法の鏡と実によく似ているのである。それ故、次のように結論することができよう。

廃墟のモモの心は、天上界のモモ姫の魔法の鏡の不完全な似姿・模造である。

廃墟のモモが聞く行為は、叡知存在モモ姫が魔法の鏡を世界へ送り出し、それが写し取ってくる像を見る行為の不完全な似姿・模造である。

なお、心を鏡に喩えることは、Ihr Herz war wie ein blinder Spiegel. (彼女の心はくもった鏡同然であった。→彼女は明確なことは何も思い出せなかった。) というドイツ語のありふれた言いまわしからもわかるように、ごく自然なことなのである。

このように不思議な能力を有しているモモによって、『モモ』の口絵に描かれているあの古代屋外円形劇場の廃墟のまわりの巷には、愛、空想、希望、信念の超自然的徳に満たされたモモの理想的社会が形成され、隆盛をきわめたのである。『モモ』の第2部「灰色の男たち」では、健全な生命活動が隆盛をきわめているモモの理想的社会の中へ灰色の男たちが、さながら目に見えない侵略軍のように入り込んできて、モモの社会の人々を征服して行く。ついには、モモ1人を残して全員、灰色の男たちに征服されてしまう。ここに到って、モモと灰色の男たちは、時間をめぐって生死をかけて戦うことになる。『モモ』の副題が「時間泥棒と盗まれた時間を人間にとり返してくれた子供についての不思議な物語」とあるのは、このことをさしているのである。ただし、次のことは理解しておかなければならない。灰色の男たちが時間を盗むとか、その盗まれた時間をモモが取り返すとかいうことは、灰色の男たちが例えばお金を盗むとか、その盗まれたお金をモモが取り返すとかいうこととは具合がちがう。時間は盗まれたり取り返されたりしても、その時間はあっちへ行ったりこっちへ来たりするわけではないのだ。時間が灰色の男たちに盗まれるということは、時間が灰色に変わるということである。灰色の男たちの性質を帯びた時間、すなわち灰色の男たちの価値観を帯びた時間に変わる、ということなのである。同様に、灰色の男たちに盗まれた時間をモモが取り返すということは、灰色の時間がモモ色に変わるということ、すなわち灰色の男たちの価値観を帯びた時間がモモの価値観を帯びた時間に変わる、ということなのである。

ところで、物語『モモ』でエンデが問題とした時間とはどういう種類の時間であろうか。エンデは言う。»Zeit ist Leben.«<sup>(14)</sup>これは「時間は生きることである。」という意味にも、「時間は生活である。」という意味にも、「時間は生命である。」という意味にも解釈できる。おそらくは、この三つの訳を総合した意味

